

第9回 TEAP連絡協議会レポート

大学入学共通テストに向けて TEAPの現状とこれから



公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は、第9回TEAP連絡協議会を2018年7月、東京（法政大学）と大阪（近畿大学）で開催した。今回は高等学校でのTEAPの活用状況や、大学における入試でのTEAP利用状況および英語教育改革への取り組みについて、TEAP採用校からの報告を受け、高等学校および大学では今後、大学入試に向けてどのように取り組んでいくべきかを、登壇者と参加者がともに考える場となった。大阪会場での発表内容をご紹介します。

01 2017年度 TEAP公開試験実施報告

英検協会 教育事業部部長 塩崎 修健

2017年度は年3回、全国12都市にて実施。3回の合計志願者数は前年度比176%の2万4,434名となった。その背景には、①入試で利用する大学が急増していること、②高等学校での団体受験者数が増加していることがある。志願者層は、入試での利用を見越して早めに準備を開始しようとする高校2年生の第2回での割合が増したほか、第3回では入試直前まで挑戦し、より高いスコア取得をめざす高校3年生の割合が多かった。

2018年度については、TEAPは全国20都市、TEAP CBTは全国11都道府県での実施を予定しており、2020年度にはTEAPを全国47都道府県で実施する予定だ。また、TEAP採用大学数は120大学まで広がり、2018年度入試に関する大学への調査では、外部検定試験での英検®とTEAPの採用が圧倒的に多かった。高校生が利用した外部検定試験についても、学習指導要領に配慮した問題設計であり、普段の英語学習の成

果を発揮できるとして、英検とTEAPが選ばれていることが明らかになった。



02 高校現場でのTEAP活用状況 —進学実績につながる4技能指導法

大宮開成中学・高等学校 中高一貫部高校主任 小林 佑樹 先生

大宮開成中学・高等学校は生徒全員の4年制大学への現役合格をめざし、国立大学や難関私立大学への合格実績が



伸びている。進路指導においては、進路指導部主導でなく、学年の担任がイニシアチブを取り、合格実績に関する数値目標を設定して取り組む。英語科では高等学校入学前から基礎基本の習得を徹底したうえで、4技能をバランスよく育成し、思考力を鍛えることを重視している。

TEAPの受験者数は年々増加しており、2017年度は378名が受験。全国最多の個人受験者数となった。校内におけるTEAP受験者数増加の背景には、TEAPプロジェクトの発足により、教員、生徒、保護者が一体となって取り組んできたこ

とがある。生徒向けのガイダンスや技能別対策講座、後輩への受験報告会のほか、保護者会ではTEAPについての説明を行い、大学入試への理解を得た。TEAPは難易度が適度であり、語彙や場面が生徒に分かりやすい設問だという印象を受けている。また、早期に受験して志望大学の基準スコアを超えることで、他教科の学習に専念することができ、センター試験や大学の入試対策としても有効である。今後も、進取の精神による新しい入試への挑戦と、協働の精神による他教科教員・担任・保護者との連携を進めていきたい。

03 明治大学の入試における外部試験利用と教育効果

明治大学 経営学部 山下 佳江 教授

一般選抜入試における英語4技能試験の活用は、2017年度入試での経営学部の「英語4技能試験活用方式」の導入に始まった。2018年度入試では商学部が「英語4技能利用方式」、国際日本学部が「英語4技能試験を活用した外国語満点換算方法」を導入した。2019年度入試では、全学部統一入試で「英語4技能試験を活用した外国語満点換算方法」を導入。農学部、経営学部、国際日本学部、総合数理学部の4学部が実施し、TEAPなどのスコア

に応じた英語試験の基礎得点を付与する。

経営学部では、海外留学や国際ビジネスに興味のある学生のため英語スキルと専門知識を融合した英語ベースの特別カリキュラム「グローバル人材経営育成 トラックGREAT」を設置した。高大接続の観点からいち早く「英語4技能試験活用方式」を導入、入学前から4技能を駆使した英語運用能力の獲得をめざす志願者を募集し、GREATなど学部の国際教育との接続を図った。5年間で明治大学と海外大学の2

つの学位取得可能なデュアルディグリープログラムやハーバード大学など海外トップユニバーシティへの派遣も始まった。明治大学では、今後も高い志をもつ学生を力強く後押ししていく。



04 京都大学の英語教育改革と高大接続に向けた準備状況

京都大学 国際高等教育院附属国際学術言語教育センター 金丸 敏幸 准教授

2016年度より、1回生はリーディングとライティング-リスニングの2科目を必修とした。リーディングでは学部ごとの目標に合



わせた教科書を設定し、英語を通じた教養を身に付け、ディスカッションやプレゼンテーションを含む授業を行う。ライティング-リスニングは全クラス共通のシラバスを作成し、目標と評価の統一を図っている。ライティングは前期で300~500語の英語エッセイ、後期には1,000~1,500語の英語レポートに取り組む。リスニングはオンライン教材で課題に取り組む、授業中にリスニングテストを行う。

2回生以降の選択科目「英語で学ぶ教

養・共通科目」には280科目以上を設定。海外大学と同水準で学び、学術英語を実践的に修得して、留学生と交流を深める機会も用意した。1回生から海外大学でのサマープログラムに参加し、3回生では半年から1年の交換留学へ出る学生も多い。

入試では英語認定試験の成績によって、高等学校から大学の一貫した英語運用能力を評価し、入学後の英語による学習の可能性を判断する材料としたい。入学後にそれらを活用する方向も検討していきたい。

05 近畿大学国際学部の早期留学と英語教育の取り組みと成果

近畿大学 国際学部 高木 宏幸 教授

国際学部では、全学生が1年次後期から2年次前期にアメリカへ留学する。そのため1年次前期は、留学中の英語学習と継続性をもたせるため、留学時に学ぶELSランゲージセンターの教員が授業を行う。留学中は提携大学のELSランゲージセンターでの語学留学を基本とし、英語力の高い学生には、留学後半に現地大学の正規科目を履修することができる機会も用意している。帰国後は、ビジネス・アカデミック英語として実用的な英語力の習得をめざす。また、留

学中に培った力を伸ばすため、2年次後期以降は専門科目の多くを英語でも開講し、実用的な知識や技能を扱う科目や、専門性を深める科目を履修することができる。さらに、スキルを広げたい学生を対象に、選択科目として第二外国語(独・仏・西・中・韓・タイ・ベトナム)も開講し、高いレベルでモチベーションを保つための工夫を施している。

国際学部における留学とは、大学生活の集大成ではない。入学直後の早期段階に留学し、異文化体験をすることで、課題

や問題意識を整理し、教養・専門科目における、より深い学修へとつなぐ基盤として捉えている。

